

瞳

さいとう みち子

先輩は、育児休暇前と全く変わらない華やかさで現れた。きらきらの笑顔、派手目なセンスの服装、隙のないヘアメイク。この人は本当に、初めての子を育てる母親なんだろうか。まもなく続いて、上品な笑顔で遠慮がちにオフィスへ入ってきたのは、先輩のお母様だ。

その腕の中に、彼女はいた。生まれてたった二ヶ月。すでに髪の毛はしっかり生えそろっていたが、肌は文字どおり、何にも汚されていないかのようにふわふわだ。そして、まだ泣き声しか上げられないほど未熟であるにもかかわらず、その目はしっかりと見開かれていた。まるで濁りのない、潤んだ真っ黒なその瞳は、周りの見知らぬ大人たちをきよろきよろと、しかし力強く見つめている。「可愛い！」大人たちは声を上げる。彼女はますます不思議そうな顔をする。そんな最愛の我が子を手渡された母親は、恥ずかしげもなく、公然と彼女の頬にキスをする。

私もかつては、こんな瞳を持っていたのだろうか。なんだかとても哀しくなつた。

わずか十人足らずの私たちの部屋では、ほぼ全員が結婚経験者である（離婚経験者も含めて）。そして私以外には、すでに大きくなった自分の子どもや、あるいは目に入れても痛くないような幼い甥っ子、姪っ子がいる。しかも上司の一人を除いて、全員が女性なのである。まもなくお昼休みに入ると、そんな女性陣一同で、いつものようにラウンジへ集まる。だが今日は特別だ。何せ、こんなにだいたいなゲストを迎えているのだから。数ヶ月ぶりの懐かしい集まりに、先輩も顔をほころばせていた。お弁当を広げながら、「お姉さま方」は皆、黄色い声を上げて、彼女を抱きたがった。見計らったかのように、先輩が言う。

「ちよっと用事を済ませてくるので、この子の面倒、見てもらっていいですか？」
待つてましたとばかりのお姉さま方。たらいまわしにされる彼女。何のためらいもなく携帯電話で写真を撮る者までいた。ああ！ 可愛い！ 可愛い！ この手！ この足！

嫌。やめて。どうして、そんな目で、この子を見るの？

どうして、そんな目で、あたしを見るの？

この人たちは、誰？ お母さんがいない。

「お母さんはちよつと出かけているからね。すぐに戻ってくるから。それまでお姉ちゃんたちと遊んでいましょう」「誰がお姉ちゃんよ、おばちゃんでしょう？」「やだ、もうおばあちゃんかもしれないわよ」「本当に可愛いわね」「お母さんにそっくりね」「お父さんのほうに似てるわよ」「ねえ、この折り紙で飛行機でも作りましょうか」「何言ってるの、女の子は手遊びのほうが好きなのよ」

可愛い、可愛い。ふふふ。あはは。がやがや。

やかましい。何をしゃべっているのか、ちつともわからない。わかりたくもない。聴きたくもない。あなたたちは、あたしや、お母さんや、お父さんの、何を知っているというの？ 嫌い。この人たち、嫌い！ ここはどこ？ お母さんは、どこにいるの？ お母さん、お母さん……！

私自身のことなんて全く見ていない大人たちが、物心ついたばかりの私は、大嫌いだった。あいつらは、あいつらの中だけで楽しんでるだけだ。可愛いのは、思い出の中の自分の子どもなんじゃないか。自分の子どもや、自分の甥、姪の思い出を、無力なあたしに投影しているだけなんだ！

あたしは見世物じゃない。あたしは、あなたたちのおもちゃなんかじゃない。

不意に、彼女の顔が崩れた。穏やかな笑顔の色が変わる。目や頬の周りが引きつる。やがて眉をしかめると、まるで咳き込むような小さな声で、彼女は泣き始めた。ああ、彼女は助けを求めている。お母さんと呼んでいる。叫び声はどんどん激しくなった。そう、今まさにこの世が終わってしまうかのように。いや、本当に、彼女にとっての世界は、終末の危機に面しているのだ。苦しい。苦しい。助けて。助けて。お母さん。お母さん。お母さん！

「あらあら。ほら、やっぱり知らないおばちゃんに抱かれるのは怖いだよ」「ちよつと、今誰の顔見て泣いた？」「ごめんねー。お母さん、もうちよつとで帰ってくるからねー」あんたたちには、どれだけ事が深刻かわかっているのか。彼女は今、自らに死の危険すら感じて、泣き叫んでいるというのに！

母親が帰ってきた。「ごめんごめん！ ちよつと遅くなっちゃった。皆さん、すみません、ご迷惑をおかけしてしまって」よかった。よかった。彼女は、魔法にでもかかったかのように、その瞬間泣き止んだ。お母さん、どこに行っていたの？もう、どこ

にも行かないで。ずっと私のそばにいて。二度と、怖いおばさんたちの中で独りぼっちにしないで。

「ほら、さいとうさんにも、ごめんなさいって、挨拶して」

「さいとうさんも抱いてみたらいいわよ」「そうだよ」

彼女の瞳が私を見つめる。澄んだ目。安らかな表情。静かな息遣い。

怖い。

口に出してしまつて後悔した。親の前で、決して言うてはならないことだった。だがそれは本音だった。こんな気高い魂を、私なんか抱くことはできない。

空気は一瞬張り詰めたが、それも気のせいだったかのように、すぐに和らいだ。年上の同僚たちは、私のことを「まだ若いんだ」などと思つたろうか。あるいは理解できないと思われたかもしれない。だが、大人たちに何を思われようが関係ない。ほかでもない彼女は、私のことを、どう思つたんだろうか。その濁りのない目で見つめた私を。自分を前にして「怖い」と言い放つた私を。

私の目は、まだ澄んでいただろうか。彼女はその奥に、何かを見透かしたのだろうか。あたしの気持ちをわかつたつもりになつて。大人のくせに。

「すみません。私はまだまだガキんちよですね。母親にはなれません」

笑つてごまかした私を、彼女は見ている。あたしは、見ている。